

初対面の2人会話におけるあいづち行動

－非言語行動を含めて－

大塚容子

Back-channels in the First Encounter Conversation between Two Persons

OTSUKA, Yoko

Abstract

Otsuka (2011, 2014, 2015) have investigated how vocal back-channels are used in Japanese first-encounter conversations among three males. In this paper, not only vocal back-channels, but also non-vocal backchannels will be investigated, specifically in a Japanese first-encounter conversation between two males. We will show that the non-vocal backchannels play a very important role in the constructing the interpersonal relationship in the Japanese conversation.

Key words

back-channel, vocal, non-vocal, head movement, gaze

はじめに

会話は話し手と聞き手との相互作用によって展開される。話し手だけが一方的に発話するのではなく、聞き手は話し手が発話を円滑に進めることができるように、様々な働きを行う。その最も典型的な言語行動があいづちを打つことである。日本語は会話の間にあいづちを頻繁に打つことで知られている。日本語と英語の男性3人による初対面会話の音声によるあいづち行動を比較研究した大塚(2015)は、日本語は英語より頻繁にあいづちを打つこと、日本語では英語よりも非語彙的あいづちが多く用いられること、日本語と英語ではあいづちの談話上のコンテキストが異なることを示した。

あいづちの研究は非言語行動を含めて研究されることが多く、日米会話における非言語行動を比較分析したメイナード(1993:177)は、日本語会話のなかであいづちとして使われるうなずきは米語会話の約2.6倍であると報告している。さらに、Kita and Ide(2007:1243)は、Iwasaki(1997)、Kogure(2007)、Kita(1999)の先行研究を踏まえて、日本語会話ではあいづちとうなずきは他の会話参加者からあいづちとうなずきを引き出すような働きをしているとし、両者は密接な関係をもっていると述べている。一般的に聞き手が打つと考えられているあいづちやうなずきは、聞き手の単独行動として起こるのではなく、話し手の言語行動に反応しながら生まれるのである。

本稿では、男性の日本語母語話者2人による初対面会話におけるあいづち行動を、非言語行動を含めて調査し、音声によるあいづちと非言語行動によるあいづちの関係を示し、聞き手のあいづちがどのような話し手の言語行動によって誘発されるのかを明らかにする。

1. あいづち

1-1. あいづちの定義

大塚(2015)に倣い、堀口(1997:42)の定義に基づく。すなわち、「話し手が発話権を行使している間に、聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現」とし、音声表現だけでなく、非言語行動も調査対象とする。音声表現は、いわゆる「相づち詞」(堀口(1988:16))に限定し、繰り返し、言い換え、先取り発話は含めない。

1-2. あいづちの分類

本稿では、あいづちを次の3種類に分類する。

(1) あいづちの分類

① 非言語行動のみによるあいづち

音声表現を伴わず、頭を動かすあいづちである。頭を上から下に動かす、いわゆる「うなずき」と、下から上に動かす動作とがある。頭を横に動かす動作、聞き返しとして機能する動作、笑い、微笑みなどは含まない。

② 音声のみによるあいづち

音声によるあいづちは「ああ」「はあ」「ほう」などの非語彙的なあいづちと、「はい」「そうですね」「たしかに」などの語彙的なあいづちとがある。

③ 非言語行動と音声表現が同時に現われるあいづち

非言語行動を伴って打たれる音声表現のあいづちである。久保田(2001:106)に従い、以後、「同時あいづち」と呼ぶことにする。非言語行動は①と同様、頭を上から下に動かす場合と、下から上に動かす場合がある。

2. 調査

2-1. 調査資料

本稿で使用するデータは約30分間の男性2人による初対面会話⁽¹⁾である。会話はビデオに録画すると同時に、ICレコーダーに録音した。会話収録日は2011年11月27日で、収録場所は東京である。会話参加者はJ33とJ40で、二人とも大学院生であるが、所属先は異なる。会話の場面設定は、知り合いの先生のパーティーに招待されて、そこで初めて出会った相手と会話を行うというものである。

会話収録後、1人ずつ10分程度のフォローアップ・インタビューを実施した。会話参加者に対する印象、会話の展開などについて質問した。フォローアップ・インタビューの内容はICレコーダーに録音した。

2-2. 調査手順

会話は宇佐美(2011)に基づき、発話文を単位に文字化⁽²⁾した。この文字化した資料が本稿の基礎データである。宇佐美(2011)によれば、発話文は「会話という相互作用の中における『文』」であり、発話文の認定については「話者交替」と「間」が重要な要素となる。本稿では、あいづちが調査対象であることから、あいづちを独立した発話文として認定する。そして、あいづちを挟んで一人の話者の発話が「文」として連続していると判断できる場合は、発話の連続として捉え1発話文とみなす。

(2) 発話文の認定

発話文番号	話者	発話内容
01	17-1	J33
02		《少し間》なんていうかな、こう、例えば、こう、なんか日本語で、考えたときに、こう、じ、地面を掘るっていう、言い方を、
03	18	J40
04	17-2	J33
05		するのは、穴を掘るっていう、言い方をすることも、あると思うんですけど。{ }、
06	19	J40
07	17-3	J33
08		地面を掘るの場合は、こうなんか、地面に対して働きかける、っていうことを、意味するのに対して、穴を掘るの場合って、穴に対してなんかやっているっていうよりも、なんか掘った結果できるのが、
09		
10		
11	20	J40
12	17-4	J33
		穴っていう感じで。

上記のJ33の発話は、J40があいづちを打つことによって話者が交替しているが、発話内容は「文」として連続しているので、発話文番号17-1～4で、1発話文とみなす。

3. 分析

宇佐美（2012）を使って、あいづち行動を音声によるもの、非言語によるもの両者の観点から分析する。

3-1. 会話の全体像

話者交替回数は723回で、それぞれの話者の発話文数は表1のとおりである。J33の発話文数がJ40の発話文数を若干上回っているが、2人の会話参加者があいづちを含めてほぼ均等に会話に参加していたと言える。

表1 各会話参加者の発話文数

話者	頻度	割合
J33	411	55.17%
J40	334	44.83%
会話	745	100.00%

3-2. 各会話参加者のあいづちの使用状況

3-2-1. 発話文とあいづちからなる発話文

各会話参加者のあいづちから成る発話文（以後、「あいづち発話文」と呼ぶ。）がそれぞれの発話文総数に占める割合を調査する。J33のあいづち発話文数は184で、発話文総数に占める割合は44.77%である。一方、J40のあいづち発話文数は59で、発話文総数に占める割合は17.66%である。J40よりJ33のほうがより頻繁に音声によるあいづちを打っていることがわかる。

3-2-2. 各会話参加者のあいづちの使用状況

表2は各会話参加者が使用したあいづちの使用状況を示したものである。非言語行動のみのあいづちは、連続して頭の上下運動が行われることが多々ある。このような連続したあいづちは全体として1回のあいづちとはせず、頭を上下に動かした回数を数える。

表2 各会話参加者の使用したあいづちの頻度

話者	非言語行動のみ		音声言語のみ		同時あいづち		合計	
	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合
J33	196	51.58%	26	6.84%	158	41.58%	380	100.00%
J40	288	83.00%	15	4.32%	44	12.68%	347	100.00%
会話	484	66.57%	41	5.64%	202	27.79%	727	100.00%

いずれの会話参加者も音声のみによるあいづちの頻度は低い。J40は非言語のみのあいづちの頻度が圧倒的に高い。J33も使用したあいづちのなかでは、非言語のみのあいづちの頻度が最も高いが、同時あいづちの頻度はJ40より高い。

3-2-2-1. 同時あいづちの頭の動き

同時あいづちのうち、頭を上から下に動かした動作と、下から上に動かした動作の頻度を表3に示す。

表3 同時あいづちにおける頭の動き

話者	縦下		縦上		合計	
	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合
J33	110	69.62%	48	30.38%	158	100.00%
J40	35	79.55%	9	20.45%	44	100.00%
会話	145	71.78%	57	28.22%	202	100.00%

いずれの会話参加者も頭を上から下に動かす「うなずき」の使用頻度のほうが、下から上に動かす行動の使用頻度より高い。

3-2-2-2. あいづち発話文

あいづち発話文は、下記のように19種類に分類される。

(3) あいづち発話文の分類

- ① ああ
- ② いやー
- ③ うわー
- ④ うん
- ⑤ ええ
- ⑥ おお

- ⑦ そうか
- ⑧ そうですね
- ⑨ そうですよ
- ⑩ たしかに
- ⑪ なるほど
- ⑫ はあ
- ⑬ はい
- ⑭ ふうん
- ⑮ ふん
- ⑯ へえー
- ⑰ ほう
- ⑱ やー
- ⑲ 複合

同じ種類のあいづちが複数使用される場合は、1つのあいづちとみなす。種類の異なるあいづちが複数使用されている場合は、「複合」と捉える。以下に、各会話参加者のあいづち発話文の使用状況を示す。

表4 あいづち発話文の使用状況

話者	ああ		いやー		うわー		うん	
	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合
J33	29	15.76%	1	0.54%	5	2.71%	77	41.85%
J40	8	13.56%	0	0.00%	1	1.69%	4	6.78%
会話	37	15.23%	1	0.41%	6	2.47%	81	33.33%

ええ		おお		そうか		そうですね	
頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合
1	0.54%	1	0.54%	1	0.54%	2	1.09%
0	0.00%	7	11.86%	1	1.69%	5	8.47%
1	0.41%	8	3.29%	2	0.82%	7	2.88%

そうですよね		たしかに		なるほど		はあ	
頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合
2	1.09%	0	0.00%	13	7.07%	4	2.17%
0	0.00%	1	1.69%	5	8.47%	3	5.08%
2	0.82%	1	0.41%	18	7.41%	7	2.88%

はい		ふうん		ふん		へえー	
頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合
7	3.80%	1	0.54%	0	0.00%	31	16.85%
11	18.64%	3	5.08%	2	3.39%	4	6.78%
18	7.41%	4	1.65%	2	0.82%	35	14.40%

ほう		やー		複合		合計	
頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合
0	0.00%	0	0.00%	9	4.89%	184	100.00%
1	1.69%	1	1.69%	2	3.39%	59	100.00%
1	0.41%	1	0.41%	11	4.53%	243	100.00%

あいづち発話文の使用頻度は J40 より J33 のほうが高い。J33 の使用数は J40 の約 3 倍に及ぶ。しかし、非言語行動のみによるあいづちは J40 の使用頻度が J33 を上回っており、非言語行動を含めて総合的に両者のあいづち行動を見ると、両者の間にあいづちの使用頻度の差はあまりない。

あいづち発話文のうち、実質的な意味をもつあいづち⁽³⁾ — 「そうか」「そうですね」「そうですよね」「たしかに」「なるほど」「はい」「複合」 — のそれぞれの会話参加者の使用率は、J33 が 34 回で、あいづち発話文総数に占める割合は、18.48% である。J40 は 25 回で、全体に占める割合は 42.37% である。このような実質的な意味をもつあいづちの使用頻度は会話参加者によって違いがあるが、両者に共通して言えることは、実質的な意味をもたないあいづちの使用頻度のほうが高いということである。これは大塚 (2015) の調査結果と合致する。

3-3. あいづちの打たれるコンテキスト

あいづちがどのような環境で打たれているかを、2つの観点から調査する。1つは、メイナード (1993: 96) が提案した PPU (Pause-bounded Phrasal Unit) という単位である。自然会話では、長い文がポーズによって分断されて発話されることが多い。PPU とはそのポーズによって分断される表現を1つの単位とみなしたものである。

2つ目の観点は、発話文という単位である。本稿では発話文という単位で文字化を行っている。前述したように、発話文の認定には「話者交替」と「間」が重要な要素となっている。PPU と発話文は、「間」という現象に着目すれば重なる単位であるが、たとえ話者交替が起こったとしても、同一話者の連続した発話が「文」として認定される場合には1発話文とみなしている。PPU が音声面での単位であるのに対し、発話文は発話内容を重視した単位であると言える。

音声によるあいづちに限定して、それらがどのようなコンテキストで現われているかを以下に示す。

3-3-1. PPU

音声によるあいづちが PPU 末に打たれているか、PPU 中に打たれているかを調査したのが表 5 である。

表5 PPUの観点からみたあいづちの使用状況

話者	PPU 末		PPU 中		合計	
	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合
J33	127	69.02%	57	30.98%	184	100.00%
J40	43	72.88%	16	27.12%	59	100.00%
会話	170	69.96%	73	30.04%	243	100.00%

いずれの会話参加者も PPU 末に打っているあいづちの頻度のほうが PPU 中に打っているあいづちの頻度より高い。

3-3-2. 発話文

表6は音声のあいづちが発話文のどの位置で現われているかを示したものである。

表6 発話文の観点からみたあいづちの使用状況

話者	発話文末		発話文中		合計	
	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合
J33	86	46.74%	98	53.26%	184	100.00%
J40	25	42.37%	34	57.63%	59	100.00%
会話	111	45.68%	132	54.32%	243	100.00%

いずれの会話参加者も発話文末よりも発話文の途中で打たれたあいづちの頻度のほうが高い。これは大塚（2015：179）で日本語の「あいづちは完結文の後ではなく、中途発話文の後に打たれることが多い」という調査結果と合致する⁽⁴⁾。

発話文と PPU の関係を考えてみると、発話文の認定基準の一つに「間」が挙げられていることから、発話文末と PPU 末は一致する。では、発話文中で打たれたあいづちは PPU 末と一致するのであろうか。表7は発話文中で打たれたあいづちが PPU のどの環境で打たれたかを示したものである。

表7 発話文中で打たれたあいづちと PPU との関係

話者	PPU 末		PPU 中		合計	
	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合
J33	44	44.90%	54	55.10%	98	100.00%
J40	18	52.94%	16	47.06%	34	100.00%
会話	62	46.97%	70	53.03%	132	100.00%

表6と表7から、それぞれの会話参加者の PPU 末で打たれたあいづち数がわかる。J33は130回で、J33のあいづち総数の70.65%を占める。J40は43回で、あいづち総数の72.88%である。会話全体で見ると、71.19%が PPU 末で打たれていることになる。

3-3-3. 話し手の役割

オーストラリア英語会話と、英語が堪能な日本人が話す英語会話（以後、「日本語英語」と呼ぶ。）におけるあいづちについて研究した Ike (2009: 209) は、あいづちが話し手からの働きかけの反応として現われることを示している。オーストラリア英語では視線の移動があいづちの誘発に重要な役目を果たしているのに対し、日本語英語では頭の動きが重要な役目を果たしていると述べている。日本語会話であいづちがどのように誘発されるかを明らかにするために、あいづちが打たれる直前の話し手の非言語行動を調査する。

あいづちが打たれる直前の話し手の非言語行動は次の7種類に分類される。

(4) あいづちを誘発する話し手の非言語行動

① 視線

話し手が聞き手に視線を向ける。

② 視線+うなずき

話し手が聞き手に視線を向けると同時に、頭を上から下に動かす。

③ 視線+頭の動き

話し手が聞き手に視線を向けると同時に、頭を下から上に動かす。

④ 視線はずし

話し手がそれまで聞き手に向けていた視線をはずす。

⑤ 視線はずし+うなずき

話し手がそれまで聞き手に向けていた視線をはずすと同時に、頭を上から下に動かす。

⑥ うなずき

話し手は聞き手に視線を向けることなく、頭を上から下に動かす動作のみ行う。

⑦ 頭の動き

話し手は聞き手に視線を向けることなく、頭を下から上に動かす動作のみ行う。

上記の7種類に加えて、特別な非言語行動が行われない場合を含めて、音声によるあいづちが打たれる直前の話し手の非言語行動を以下に示す⁽⁵⁾。

表8 あいづちが打たれる直前の話し手の非言語行動

話者	視線		視線・うなずき		視線・縦上		視線はずし	
	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合
J33	25	42.37%	28	47.46%	3	5.08%	0	0.00%
J40	60	33.33%	13	7.22%	0	0.00%	15	8.33%
会話	85	35.56%	41	17.15%	3	1.26%	15	6.28%

視線はずし・うなずき		うなずき		頭の動き		なし	
頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合
0	0.00%	2	3.39%	0	0.00%	1	1.69%
2	1.11%	17	9.44%	1	0.55%	72	40.00%
2	0.84%	19	7.95%	1	0.42%	73	30.54%

合計	
頻度	割合
59	99.99%
180	99.98%
239	100.00%

いずれの会話参加者も何も非言語行動を行わない場合よりも、何らかの非言語行動を行う場合のほうが多い。しかし、話し手の行動には個人差が見られる。何ら非言語行動が見られない頻度は J33 がわずかに 1.69% であるのに対し、J44 は 40.00% に上る。J33 は頭の動きを含めて聞き手に視線を向ける非言語行動が全体の 94.92% を占めるのに対し、J44 は 40.56% に過ぎない。視線は J44 に特徴的に見られる非言語行動である。

4. 考察

大塚（2011、2012、2014、2015）は、男性3人による初対面会話における言語的なあいづちのみに限定して調査してきた。本稿では、男性2人による会話のあいづちを、非言語行動を含めて調査することによって浮き彫りにされた日本語会話におけるあいづち行動の特徴について考察する。

まず、音声によるあいづちについて考える。前述したように、実質的な意味をもつあいづちよりも実質的な意味をもたないあいづちの使用頻度のほうが高い。大塚（2015：178）では、英語では日本語より実質的な意味をもつあいづちがより頻繁に用いられる傾向があることを示した。実質的な意味をもつあいづちは、話し手の発話内容に対して同意、納得、共感などを示すことができ、話し手に積極的な働きかけをすると考えられる。英語会話と日本語会話の自己開示の違いを分析した岩田（2015：47）は、英語会話では「聞き手は、あいづちを打つだけでなく、コメントをし、質問をし」ていることを指摘している。英語では単に相手の話を聞いているだけでなく、相手の発話をより発展させるように働きかける必要があるのである。英語で実質的な意味をもつあいづちが好まれるのも、日本語と英語における聞き手の役割の違いによるものと考えられる。

一方、日本語会話では会話を展開していく上で、聞き手の積極的な働きかけは必ずしも必要ではなさそうである。実質的な意味をもたないあいづちを打つことだけで、十分聞き手の役割を果たしていると考えられる。では、聞き手のあいづちはどのような機能を果たしているのであろうか。「相手の話を聞いている」「話を続けてもよい」という機能だけを担っているのであろうか。非言語によるあいづちを考察の対象に加えることによって、次にあいづちの機能を探る。

ここでは、非言語行動について考察する。非言語のみのあいづち数と同時あいづち数を合わせると、J33 は 354 回非言語によるあいづちを打っていることになり、あいづち総数に占める割合は 93.16% に及ぶ。J40 も同様に 332 回で、あいづち総数に占める割合は 95.68% を占める。非言語によるあいづちがどのようなときに頻繁に打たれるのかを調べてみると、非言語によるあいづちは自分が会話の展開を促したときに、それに対する相手の発話中であることが多い。会話の展開を促す、最も典型的な言語行動が相手への質問である。

(5) J40 の非言語行動のあいづち

01 J40 <修論の> {>} テーマも、そんな感じなんですか？。

- 02a J33 そうですね。
 02b J40 ↘ ↘
 03a J33 あの、修論は、さっきとはまたちょっと違う構文なんですけど。
 03b J40 ↘ ↘
 04a J33 なんか、こう、1つ、の、まあ動詞は同じなのに、ま、違うタイプの、あの、
 04b J40 ↘ ↘ ↘
 05a J33 構文で、使えるみたいな、感じのものを、やってて、日本語で言うと、
 05b J40 ↘ ↘ ↘ ↘
 06a J33 何だろうな。
 06b J40 ↘
 07a J33 あの、《短い間》ペンキを、壁に塗るっている言い方と、壁をペンキで
 07b J40 ↘ ↘ ↘ ↘ ↘ ↘ ↘
 08a J33 塗るって言う言い方ができて。
 08b J40 ↘ ↘ ↘
 09 J40 ああ、はいはいはい。↘

J40は01行目でJ33に質問する。02a行目から08a行目までのJ33の説明に合計22回の非言語のあいづちを打っている。そして、09行目で頭を上から下に下げながら、音声によるあいづちを発している。

以下に示すのは、J33の非言語によるあいづちである。

(6) J33の非言語によるあいづち

- 01 J33 けっこう、今回の、《短い間》<3月からは> |<|。
 02 J40 <どうなんすかねえ> |>|。
 03 J40 うーん、会津は、じ、けっこうあの、原発からは離れてるんですけど、
 04 J33 はい。↘
 05a J40 90キロとかそんぐらい、離れてるから、あんまり、《短い間》その、
 05b J33 ↘ ↘ ↘
 06 J33 <うん> |<|。↘
 07a J40 <げん、放射能> |>| とかで汚染されてはいないはずなんです、
 07b J33 ↘ ↘ ↘ ↘
 08 J33 うん。↘
 09a J40 されてない、とされてます。
 09b J33 ↘ ↘ ↘

上記(6)は、東北の地震の影響について語っているところである。直接的な質問の形式は採っていないが、01行目でJ33がJ40に対して3月からの状況について話をするように促すと、02行目からJ40が説明を始める。その間に同時あいづちも打たれているが(04、06、08行目)、非言語によるあいづちも頻繁に打たれている。日本語会話において聞き手による細やかな非言語によるあいづちが会話の展開に重要な役割を果たしていると考えられる。

このような非言語行動は、喜多(1996:63)が指摘しているように、「話を続けていいよ」というシグナルと考えるのは難しい。なぜなら、発話文中に、かつPPU末ではない位置に、そのようなシグナルを送る必要はないからである。非言語によるあいづちは、様々な方法によってター

ンを譲った会話参加者が、ターンを取って語る会話参加者と協力しながら会話を展開しようとする態度の現われであると考えられる。

次に、聞き手が音声によるあいづちを打つタイミングについて考える。3-3-3. で述べたように、個人差はあるものの、直前の話し手が何らかの非言語的なサインを送っていることが多い。視線を向けることが最も多く用いられている方法で、あいづちが打たれる直前の話し手の行動の全体に占める割合は53.97%である。また、相手に視線を向けるだけでなく、向けていた視線をはずすことによってあいづちを促すことができるようである。

頭の動きに着目すると、話し手が頭の動き（上から下に動かす場合と下から上に動かす場合の両者を含む）を行った場合、聞き手のあいづちが同時あいづちになる割合はJ33が87.88%で、J40が81.82%である。

(7) J40の聞き手としての非言語行動

- 01 J33 で、日本語、だと他にもなんか、こう、お湯を沸かすとかいう、言ったりする
 02 ときには、別に、お湯に対してなんかやんじゃなくて、沸かした結果できる
 03 のがお湯だったりとか。G+ \\
 04 J40 はあはあはあ<はあ> {<|}。 \\
 05 J33 <みたいに> {>|}。
 06 一口に目的語つつつてもいろんなのがあったりとかして。G+ \\
 07 J40 なるほど。 \\
 上記(7)では、J33がJ40に視線を向けると同時に頭を上から下に動かすと、J40も音声によるあいづちを打つと同時に頭を上から下に動かしている。

(8) J33の聞き手としての非言語行動

- 01 J40 分野違うとよくわかんないすつよね。G+ \\
 02 J33 うーん。 \\
 J40の視線と頭の動きに対応するように、J33は頭を上から下に動かしている。話し手と聞き手との間でリズムをとるように頭の動きが連鎖していることがわかる。話し手の発話中におけるうなずきだけでなく、話し手と聞き手との間のうなずきの連鎖は、会話の展開が両者の共同作業であることを非言語的に表わしていると言えよう。

日本語会話における聞き手のあいづち行動はどのような意味をもっているのだろうか。日本語のうなずきとあいづちについて、Kita & Ide (2007: 1251) は” …, social bonding can be established through the exchange of nods and *aizuchis*, relatively independently from the referential content of conversation (unlike the affiliative actions such as agreement and acceptance).” と述べている。日本語会話では、情報のやりとりだけでなく、人間同士の社会的関係の構築が重要な役割を担っているのである。その一つの手段があいづちを打つことなのである。

おわりに

本稿で示したのは、1つの会話に見られるあいづち行動である。どのようなあいづちを用いるのかはかなり個人差があるようである。これらを踏まえて今後の課題を2点挙げる。1点目は、分析データを増やして、日本語会話におけるあいづち行動をより広範に捉えることである。2点目は、頭の動きは聞き手だけでなく、話し手にも多々見られる。話し手の非言語行動を含めて考察することによって、日本語において会話をすることが情報のやりとり以外にどのような機能を

担っているかを明らかにすることである。

注

- (1) 本稿でデータとして用いる会話は大学英語教育学会待遇表現会の資料である。会話参加者番号は待遇表現会で付けられたものである。
- (2) 文字化に際し、非言語行動を記述するために、宇佐美（2011）で指定されていない記号も使用されている。記号の説明は本文後に記す。
- (3) 大塚（2015）では、実質的な意味をもつあいづちを「語彙的あいづち」、実質的な意味をもたないあいづちを「非語彙的あいづち」と呼んでいる。
- (4) 大塚（2015）では、完結文の後ではなく、中途発話文の後に打たれるあいづちの頻度が圧倒的に高い。これは文字化をするときの単位が異なるためだと考えられる。本稿では、発話文を単位に文字化しているため、述語のない発話や、文の途中で終わっている発話も1発話文と認定しているため、これらの環境が完結文の後とみなされているからである。
- (5) J33が184回あいづちを打っているにもかかわらず、直前の話し手となるJ40の非言語行動が180回となっているのは、J33があいづち発話文を連続して発話している場合が4回あるからである。あいづちとあいづちの間に「間」がある場合は、それぞれ独立したあいづち発話文とみなしている。

文字化の記号について

- 。 発話文の終わりであることを示す。
- ， 発話文が終了していないことを示す。
- ?。 疑問の発話文であることを示す。
- < > |<| 重ねられた発話であることを示す。
- < > |>| 重ねた発話であることを示す。
- ↑ 上昇イントネーションであることを示す。
- G 相手に視線を向けることを示す。
- + 同時に行われていることを示す。
- ↘ 頭の上から下の動きであることを示す。

参考文献

- 岩田祐子（2015）「日・英語会話初対面会話における自己開示の機能」『日・英語談話スタイルの対照研究—英語コミュニケーション教育への応用』ひつじ書房、37 - 91 頁
- 宇佐美まゆみ（2011）『基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese:BTSJ）2011年版』
- 宇佐美まゆみ監修（2012）「BTSJ 文字化入力支援・自動集計・複数ファイル自動集計システムセット（2012年改訂版）」『人間の相互作用研究のための多言語会話コーパスの構築とその誤用論的分析方法の開発』平成20 - 22年度科学研究費補助金基盤研究B（課題番号20320072）研究成果
- 大塚容子（2011）「初対面の3人会話におけるあいづち—ラポール構築の観点から—」『岐阜聖徳学園大学紀要<外国語学部編>』第50集、85 - 95 頁

- 大塚容子 (2012) 「初対面3人会話における共話的会話展開—あいづちを手がかりにして—」『岐阜聖徳学園大学紀要<外国語学部編>』第51集、15 - 24頁
- 大塚容子 (2014) 「初対面3人会話におけるあいづちの談話展開上の機能」『岐阜聖徳学園大学紀要<外国語学部編>』第53集、47 - 57頁
- 大塚容子 (2015) 「日・英語の初対面3人会話におけるあいづち」『日・英語談話スタイルの対照研究—英語コミュニケーション教育への応用』ひつじ書房、169 - 191頁
- 喜多壮太郎 (1996) 「あいづちとうなずきからみた日本人の対面コミュニケーション」『日本語学』第15巻第1号、58 - 66頁
- 久保田真弓 (2001) 『「あいづち」は人を活かす—新しいコミュニケーションのすすめ—』廣済堂出版
- 堀口純子 (1988) 「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』64号、13 - 26頁
- 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- メイナード、泉子・K (1993) 『会話分析』くろしお出版
- Ike, Saya (2010). Backchannel: A feature of Japanese English. In: Stoke, A. M. (Ed.), *JALT 2009 Conference Proceedings*. Tokyo: JALT, pp. 205-215.
- Iwasaki, Shoichi (1997) The Northridge earthquake conversation: the floor structure and the 'loop' sequence in Japanese conversation. *Journal of Pragmatics* 28, 661-693.
- Kita, Sotaro (1999) Japanese ideology of conversation and its structural manifestations: a study of aiduchi and head nods. In: Verschueren, J. (Ed.), *Language and Ideology: Selected Papers from the 6th International Pragmatics Conference, vol. 1*, International Pragmatics Association, Antwerp, pp. 262-269.
- Kita, Sotaro and Ide, Sachiko (2007) Nodding, *aizuchi*, and final particles in Japanese conversation: How conversation reflects the ideology of communication and social relationship. *Journal of Pragmatics* 39, 1242-1254.
- Kogure, Masato (2007) Nodding and smiling in silence during the loop sequence of backchannels in Japanese conversation. *Journal of Pragmatics* 39, 1275-1289.